

2018年10月31日 全7頁

2018年9月鉱工業生産

輸送機械工業における内外需の弱さが全体を下押し

経済調査部

研究員 廣野 洋太

エコノミスト 小林 俊介

[要約]

- 9月の生産指数は前月比▲1.1%と2ヶ月ぶりに低下し、コンセンサス（同▲0.3%）も下回った。9月は、台風21号や北海道胆振東部地震の影響が一部見られる。関西国際空港の閉鎖などの影響によって輸出が減少していることに加え、欧州の自動車など外需自体も弱かったことから、生産が手控えられた可能性もある。先行きを製造工業生産予測調査で見ると、10月：同+6.0%、11月：同▲0.8%となっている。なお、10月の先行き試算値（生産計画のバイアスを補正した値）は同+0.9%である。
- 業種別では、輸送機械工業やはん用・生産用・業務用機械工業などが低下した。品目別では普通乗用車、フラットパネル・ディスプレイ製造装置などが低下に寄与した。輸送機械工業では、北海道胆振東部地震によって操業が停止した工場があり、生産に影響した可能性がある。外需に関しては、9月はEUで自動車燃費基準の変更があり、8月の駆け込み需要の反動で新車登録台数が激減したことから、輸出も減少した。はん用・生産用・業務用機械工業は、機械受注統計を見ると受注は好調である一方、足下では生産・出荷の上昇ペースがピークアウトしつつある。
- 9月の出荷指数と在庫指数を見ると、出荷は前月比▲3.0%と大きく低下した一方、在庫は同+2.3%と上昇した。しかし、出荷の低下に寄与した業種を見ると輸送機械工業（同▲4.7%）、鉄鋼業（同▲8.8%）など台風や地震の影響で出荷が滞った業種である。災害は一時的な要因であるが、トレンドとしても出荷指数はピークアウトしつつある。

図表1：鉱工業生産の概況（季節調整済み前月比、%）

	2017年		2018年							
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
鉱工業生産	+1.8	▲4.5	+2.0	+1.4	+0.5	▲0.2	▲1.8	▲0.2	+0.2	▲1.1
コンセンサス										▲0.3
DIR予想										▲0.2
出荷	+2.0	▲4.5	+1.6	+1.2	+1.6	▲1.6	+0.3	▲2.0	+1.7	▲3.0
在庫	+0.0	▲0.5	+0.5	+3.3	▲0.6	+0.6	▲1.9	▲0.2	▲0.4	+2.3
在庫率	+0.4	+1.8	+0.3	+2.7	▲2.8	+0.1	+2.3	+0.4	▲2.1	+7.8

（注）コンセンサスはBloomberg。

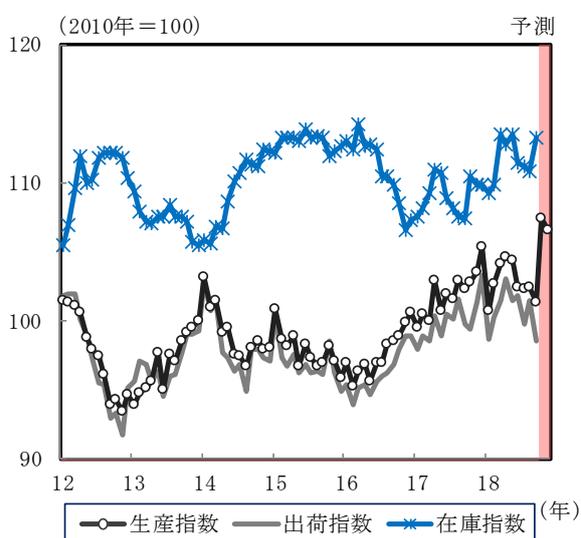
（出所）Bloomberg、経済産業省統計より大和総研作成

9月は災害の影響が見られる

9月の生産指数は前月比▲1.1%と2ヶ月ぶりに低下し、コンセンサス（同▲0.3%）も下回った。9月は、台風21号や北海道胆振東部地震の影響が一部見られる。関西国際空港の閉鎖などの影響によって輸出が減少していることに加え、欧州の自動車など外需自体も弱かったことから、生産が手控えられた可能性もある。先行きを製造工業生産予測調査で見ると、10月：同+6.0%、11月：同▲0.8%となっている。なお、10月の先行き試算値（生産計画のバイアスを補正した値、最頻値）は同+0.9%である。

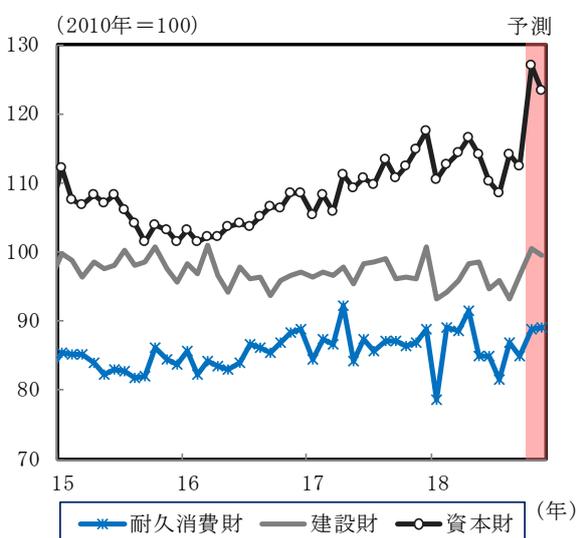
また7-9月期の生産指数は、前期比▲1.6%となっている。外需が軟調であった他、度重なる自然災害が影響したようだ。

図表2：生産・出荷・在庫



(注) 生産指数の直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

図表3：生産指数の財別内訳



(注) 直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

輸送機械工業やはん用・生産用・業務用機械工業が生産減

業種別に見ると、輸送機械工業（前月比▲2.5%）、はん用・生産用・業務用機械工業（同▲1.4%）などが全体を押し下げた。なお、生産指数は15業種中11業種で低下した。

品目別に見ると、輸送機械工業では、普通乗用車などが低下に寄与した。同業種では、北海道胆振東部地震によって操業が停止した工場があり、生産に影響した可能性がある。外需に関しては、9月はEUで自動車燃費基準の変更があり、8月の駆け込み需要の反動で新車登録台数が激減したことから、輸出も減少した。

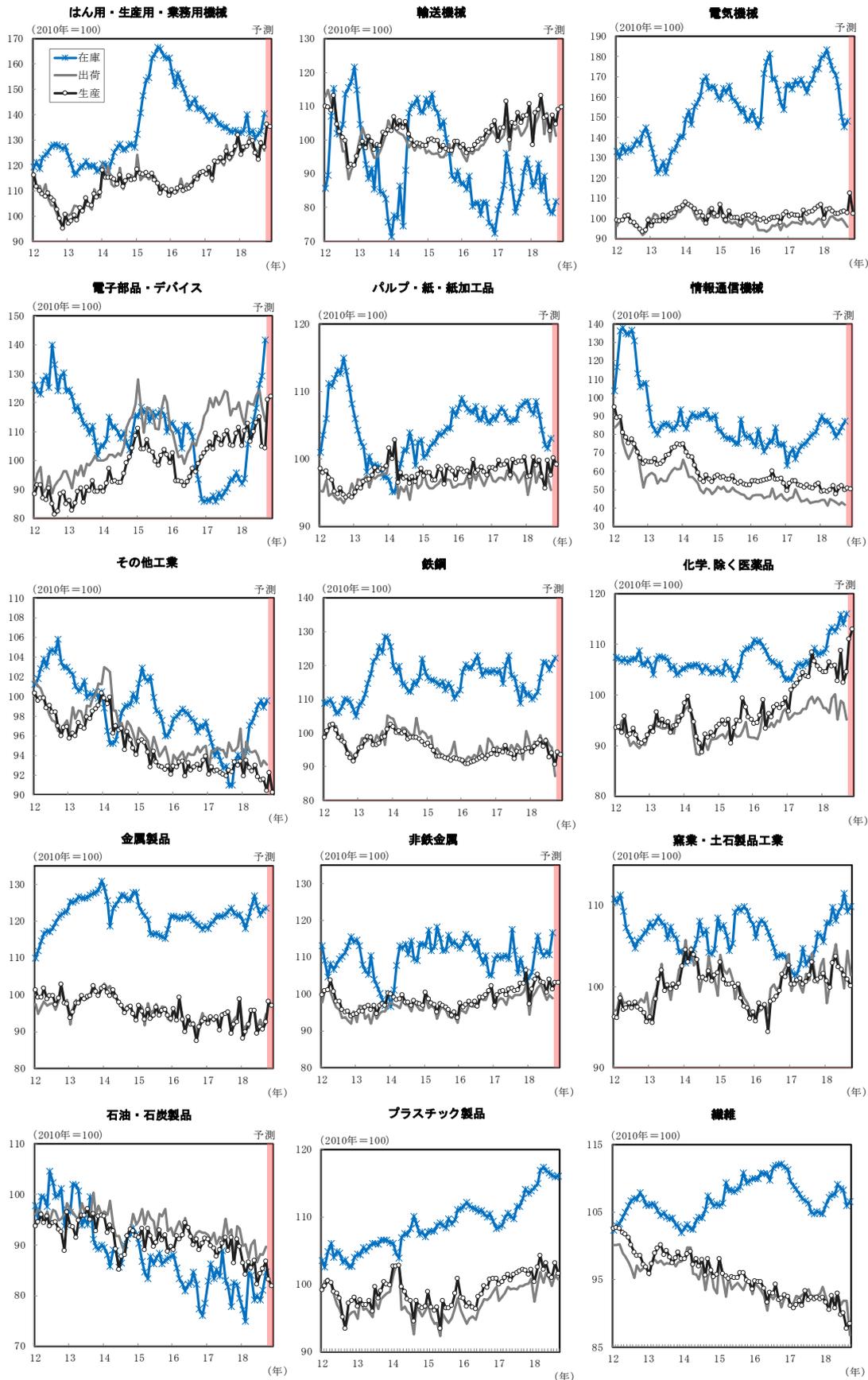
はん用・生産用・業務用機械工業においては、フラットパネル・ディスプレイ製造装置などが低下に寄与した。同業種は、機械受注統計を見ると受注は好調である一方、足下では生産・出荷の上昇ペースがピークアウトしつつある。

一方上昇したのは、化学工業（除．医薬品）（前月比+2.0%）、金属製品工業（同+2.3%）であった。化学工業では、モイスチャークリームなどが上昇に寄与した。化学工業は、2017 年半ばごろから増勢が鈍化しているものの、高水準を維持している。外需の弱さを背景にプラスチックの生産が軟調だが、化粧品の生産増が下支えとなっている。金属製品工業では橋りょうやスチール・ステンレスシャッターなどが押し上げに寄与した。

9 月の出荷減は災害の影響が大きい

9 月の出荷指数と在庫指数を見ると、出荷は前月比▲3.0%と大きく低下した一方、在庫は同+2.3%と上昇した。しかし、出荷の低下に寄与した業種を見ると輸送機械工業（同▲4.7%）、鉄鋼業（同▲8.8%）など台風や地震の影響で出荷が滞った業種である。災害は一時的な要因であるが、トレンドとしても出荷指数はピークアウトしつつある一方、在庫は上昇基調にある。

図表4：業種別、生産・出荷・在庫



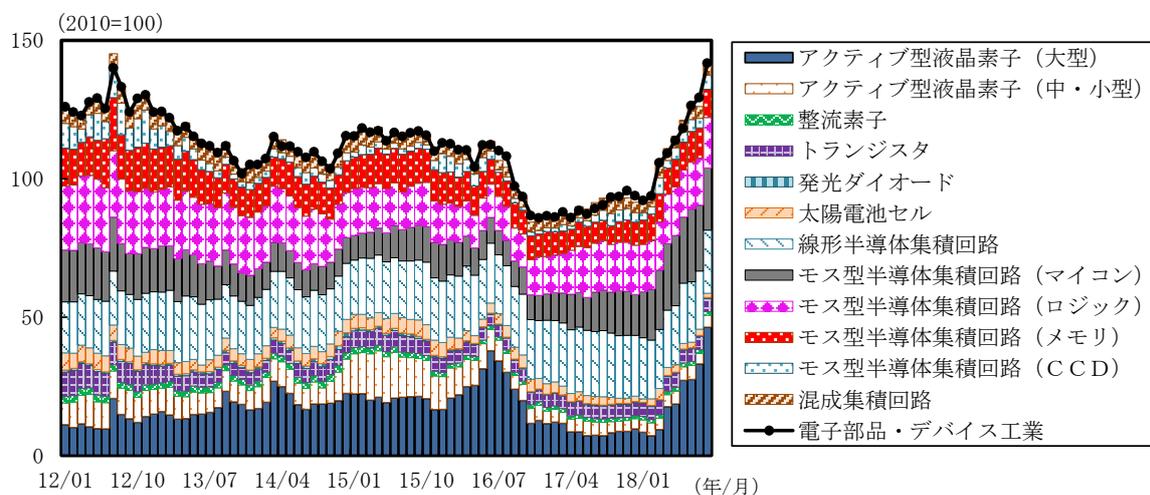
(注) 生産指数の予測値は、製造工業生産予測調査(2018年4月調査より2015年基準に変更)。
 はん用・生産用・業務用機械工業は、生産用機械工業と汎用・業務用機械工業の加重平均。
 (出所) 経済産業省統計より大和総研作成

電子部品・デバイス工業の在庫はパソコン・テレビ向けディスプレイ用部品が押し上げ

電子部品・デバイス工業の在庫が高水準に積み上がっている。同業種の在庫指数を製品別に分解すると、主要な在庫積み上げ要因は、薄型テレビやパソコンのディスプレイに利用されるアクティブ型液晶素子（大型）である。

実際、パソコン・テレビ向けディスプレイは2017年末ごろから市況が悪化するなど、需給の緩みが見られていた。この背景には、政府の支援を受けた中国系企業がディスプレイを増産したことがあるとみられる。足下の市況は底入れの兆しが見えつつあるものの、米中貿易摩擦によって米国市場から締め出された製品が再び市況を悪化させる可能性もあり、依然として注意が必要である。

図表5：電子部品・デバイス工業の在庫指数



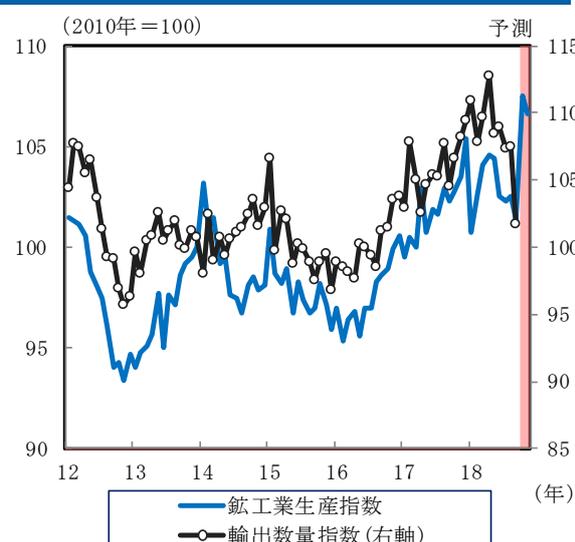
(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

先行きは非常に緩やかな増産を見込む

10月以降に関しては、非常に緩やかな増加傾向をたどるとみている。国内向けの設備投資については、2019年にかけて好調な企業業績と更新需要が全体を押し上げるとみている。他方外需は現在の緩やかな減少傾向が続くとみている。中国や欧州が緩やかに減速する一方で、米国の減税効果がプラスとなり、減少ペースは緩やかなものにとどまるだろう。

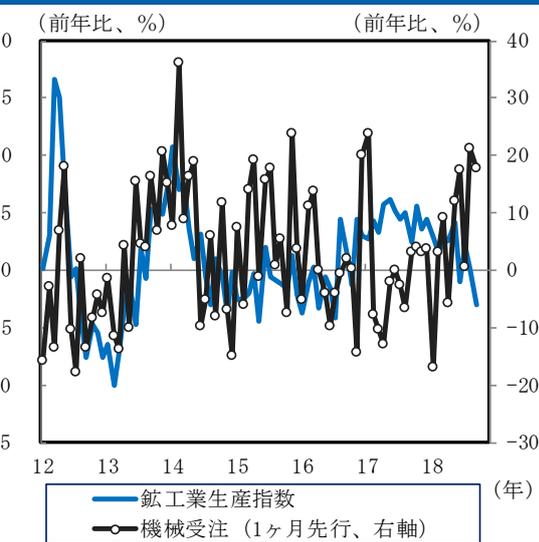
ただし長期的に見れば、外需には下振れリスクがある。米中間の貿易摩擦の激化もさることながら、日本にとっての懸念材料は米国との物品貿易協定（TAG）に向けた二国間交渉である。日本側は、TAGはFTAとは異なると主張する一方、米国側ではFTA締結を目指すといった発言が見られるなど、見解には相違がある。日本にとって最重要課題であった米国の自動車関税については当面棚上げとなったものの、トランプ大統領は日本市場が開放されない場合、日本車に20%の関税をかけるとの発言をしており、先行きには注意が必要である。

図表 6：鋳工業生産と輸出数量



(注) 鋳工業生産の直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省、内閣府統計より大和総研作成

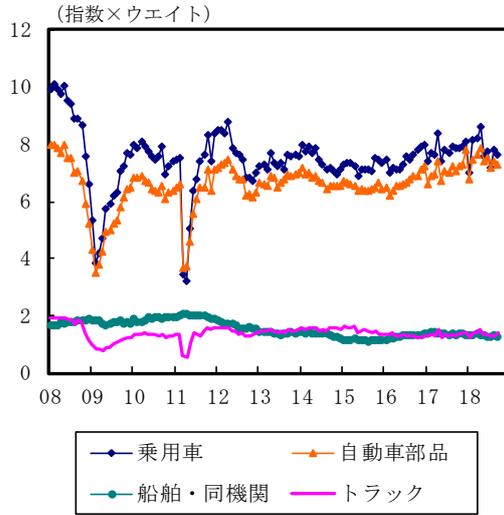
図表 7：機械受注と生産



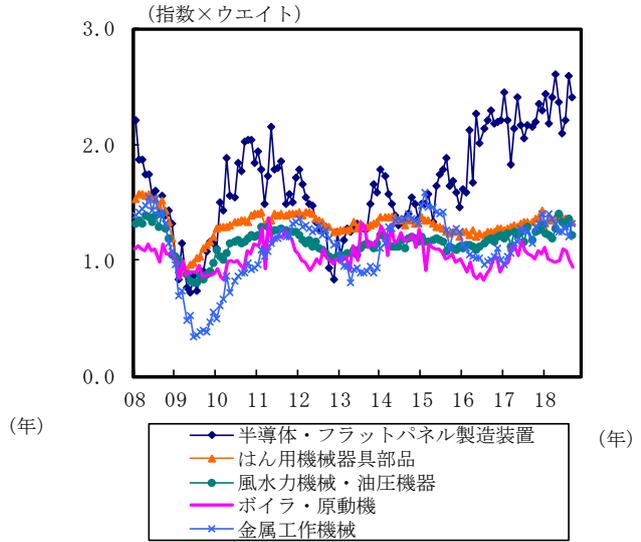
(注) 機械受注は、民需（船舶を除く）。
(出所) 経済産業省、内閣府統計より大和総研作成

主要産業の生産動向(季節調整値)

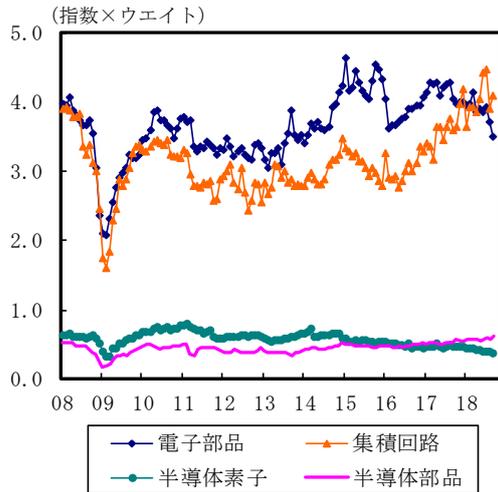
輸送機械



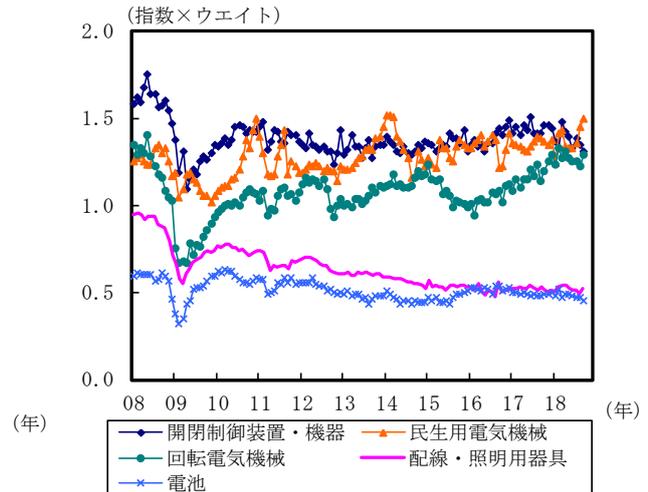
はん用・生産用・業務用機械



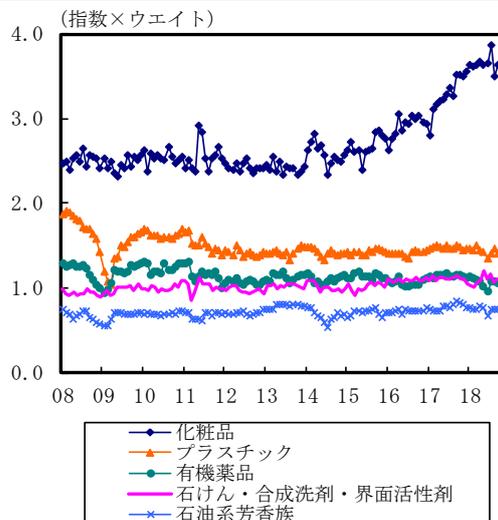
電子部品・デバイス



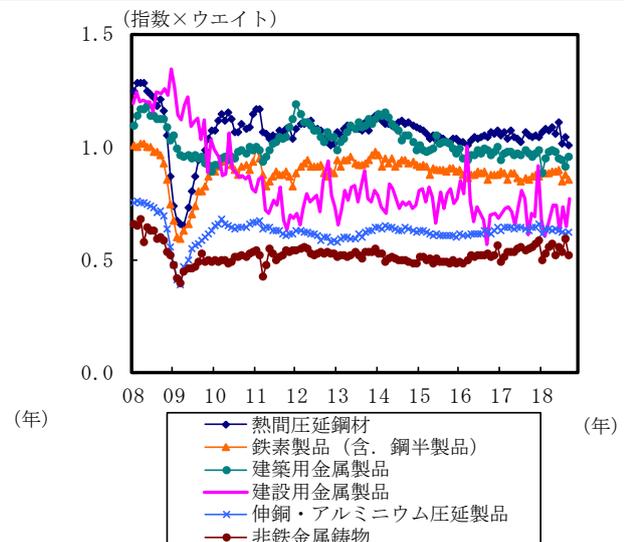
電気機械



化学



鉄鋼・非鉄金属・金属製品



(出所) 経済産業省統計より大和総研作成